
死神とカエル

寒月牙斬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神とカエル

【Nコード】

N7741V

【作者名】

寒月牙斬

【あらすじ】

藍染惣右助との戦いで全ての霊力を失った一護だったが、銀城らのお陰で、死神の力を得、再び死神代行として悪霊「ホロウ虚」から町を護っていた。

そんなある日、一護は自分自身の斬魄刀『ソウルソサエティ斬月』から常時解放型特有の最終奥義を聞き、力を手にする。

しかしそれにより、一護は尸魂界から追われる身となってしまう。浦原喜助や、四楓院夜一らにより鬼道や、穿界門を開けるようになった一護は穿界門を駆使し、逃亡。

しかし、繋ぐ作業をミスし自分が住む世界とは異なる世界へ行ってしまう…

禁断の力〜Prologue〜（前書き）

はじめまして。寒月牙斬です。

はじめてなので、文の構成や、ストーリーがグダグダですが、よろしく願います！

禁断の力〜Prologue〜

ビルが逆さまに立ち並ぶ世界。

そこには、黒衣を纏った男がいた。

この世界の住民、斬月である。

「おっさん……」

そう言ったのは、斬月の主、死神代行、黒崎一護である。

『一護……そろそろお前に教えなければならないものがある。』

「……教えなければならない……？」

一護が斬月に尋ねる。

斬月は頷き、一護に歩き寄る。

『常時解放型特有の最終奥義だ。』

その言葉で驚き、目を見開く。

「斬魄刀の最終奥義って…卍解じゃねえのか…!?!」

斬月は首を横に振り、一護の肩に手を置く。

「常時解放型の斬魄刀はその名の通り、始解の状態だ。そうになると、解放段階が一つ減る。それではこちらが不利だろう。」

そこで、と斬月と付け加える。「常時解放型の斬魄刀は、もう一段階の解放を追加した。」

…『天解』。

それが、常時解放型特有の最終奥義だ。」

「…『天解』…」

一護は、そう呟いた。

「一護。お前は、藍染惣右助との戦いで、最後の月牙天衝を教えただろう？」

あれが、天解の姿だ。

名は…『無月』。」

一護は驚きつつ、冷静を保つ。

「最後の月牙天衝と同じじゃねえか。」

そう言うと、斬月は一護を真っ直ぐ見据える。

「言ったであろう…。」最後の月牙天衝が、天解の姿になる』と。」

「そうなのか…ありがとなおっさん。」

そう言って、一護は精神世界を出た。

第1章 追われる者

精神世界から出た一護は、自分の部屋にあるベッドに横たわる。

「天解…か…」

もう一度呟いてみる。そして溜息を一つ。

「暇だから、ソウルソサエティ尸魂界に行くか。」

ベッドにかけてある代行証…死神代行戦闘許可証を手にとり自分の胸に当て死神化した。

そして背中に背負った斬月を顔の前で垂直に構えた。

「開錠！」

そう言うと穿界門が現れた。それはゆっくりと口を開く。中からはひらひらと美しい黒揚羽…『地獄蝶』が舞う。

一護はゆっくりとしたあしどりで穿界門の中へ入って行く。

一護が完全に入ると穿界門は口を閉じ、消えていった。

精神世界…

斬月が空を仰いだ。

「済まぬ…一護…」

謝る斬月。

「『天解』は…ほんとは禁じられた術なのだ。
しかし、完全虚化ホロウカを持つお前には、どうしても必要なのだ。」

斬月のいごとおりだった。

一護の霊圧は、天解特有の強く、まがまがしい霊圧へと変化していた。

一方、尸魂界：

技術開発局の局内で、異常を知らせる警鐘が鳴り響いていた。

「ルコンガイ流魂街において、異常な霊圧が感知されました！！
人物は、不明です！！」

警戒体制に入ってください！！」

それは、尸魂界の中心地、『セイレイテイ瀨霊廷』に広がる。
一護は、絶句した。

「なんだよ…これ…」

一護が見たものは、あまりにも悲惨な瀨霊廷だった。
燃え上がる炎で、建物を焼き、その直ぐ傍らで、血を流す仲間。そ
して無惨にも砕かれた斬魄刀…

仲間の状態は、生きているのか、死んでいるのか。

わからなかった。

「一体、誰が…」

そう呟いていると、遠くの方に知っている人がいた。

「檜佐木さん!!」

護廷十三隊九番隊副隊長、檜佐木修兵がいた。

「檜佐木さん。一体、何があつたんだ!？」

そう尋ねる一護だったが、どうも檜佐木の様子がおかしい。
その時、檜佐木が刀に手を掛けた。

「黒崎一護。お前を拘束する。」

「お、おい!!」

なんだよ、いきなり!!」

明らかに動揺している一護。

それに気付いたのか、死神がたくさん集まってくる。

「俺が、一体何をしたっていうんだ!？」

「とぼけるのもいい加減にしろ!!」

お前は、いきなり…卍解し、仲間を無造作に切り付けてきやがって…」

檜佐木は、刀を力強く握っているのか血が、滲んでいる。

「許さない!!」

いきなり、一護へ切り掛かる。

一護は斬月を抜き、檜佐木の斬撃を止める。

「檜佐木さん！」

俺は…何もしてねえ!!」

刃を合わせながら、一護は訴える。しかし檜佐木の瞳は、変わらない。

その瞳は、怒りで埋もれていた。

そして刃も、怒りをのせている。

力いっぱい弾くと、距離を置くように後ろに跳び退いた。

「檜佐木さん！」

何度も呼ぶが、替わりようが無い。
その時、檜佐木が口を開く。

「お前：『天解』を手にしたのか…？」

それに見開く一護。

その反応を見て、檜佐木は、さらに睨み付ける。

「やはりか…ならば、尚更だ。

お前は、禁術を手にしたからな。」

「禁術…！？」

一瞬、動きが止まり、構えが緩くなったところをつき、檜佐木は一護に切り掛かった。

「！？」

反応が遅れ、檜佐木の刃は、一護の腹を横一線に切り裂いた。

「ぐ…！」

一護からは呻き声が漏れる。
鮮血が飛び散った。

「なんで…天解を…手に入れたって…分かったんだ…!?
てか、天解って何故禁術なんだよ…!!」

腹辺りに激痛がはしる。血が出血し、止まらない。

檜佐木は冷めた目で一護を見つめた。

「…霊圧だ。
お前は気付いてはいないようだが、霊圧がさらに強く、まがまがし
くなっている。」

「!?!」

一護は、気づかなかつたのだ。
重苦しい霊圧の変化に…

「く…っ!!」

腹の傷を抑え、走り出す。

「追え!!」

檜佐木が隊員に指示を出すと、一気に追い掛けて来た。

仲間をむやみに傷付ける事が出来ない一護は、身体中に傷を作って行きながら、流魂街の外れにある森へと脱走した。

「はぁ…はぁ…」

追っ手の霊圧が感じなくなったところで、一護は、近くにあった木に寄り掛かり座り込んだ。

身体の内から流血している。

「くそ…どうなってやがるんだ…『天解』は禁術だって…はじめて知ったし…」

応急処置をしようとゆっくり、鉛の様に重い身体を持ち上げようとしたとき、二つの一護がよく知る霊圧を感じた。

「この霊圧は…」

「見つけたぜ！…一護お！…！」

その霊圧の持ち主は…

護廷十三隊六番隊副隊長、阿散井恋次。

護廷十三隊十三番隊隊士、朽木ルキア。

二人とも、一護とはとても仲が良かった…だが、

二人は刃を一護に向けていた。

「一護。貴様を今回の事件の犯人及び、禁術をてにしたことによる重禍罪者として、拘束する。」

「てめえだけは許せねえ…」

裏切り者が…！」

吠えろ、『蛇尾丸』…！」

恋次は高く跳び上がる。

そして力いっぱい一護に向かって振り下ろした。

一護は重い腕を動かし、斬月の柄を握る。

そして恋次の斬撃を受け止めた。

「恋次、ルキア！！わかってくれ！

俺は何も…してねえ！！」

恋次の刀をおもいつきり弾いたが…

「舞え…『袖白雪』…

次の舞、『白漣』！」

ルキアの攻撃により、一護の左腕は、凍った。

「くっ…縛道の六十一、『六杖光牢』」

その術は二人を縛り、四肢を奪った。

その隙に一護は二人からも離れた。

「はあ…はあ…」

流血し過ぎたと、思った。既に意識が朦朧としている。

するとあっちの方が騒がしくなった。

こちらを嗅ぎ付けたのだろう。

「仕方ない…逃げるか。」

一護は再び穿界門を開く。

ふらふらとしたあしどりで、穿界門へ入って行った。

「待て、一護！！」

ルキア達が駆け付けた時、一護が開いた穿界門は、既に口を閉じ、消えかけていた。

ルキアは、足元を見る。

草はどす黒い赤色に染まっていた。

「一護…貴様は本当に我々を裏切ったのか…？」

やがて一護の霊圧は完全に途絶えていた。

あの強く、まがまがしい霊圧も…

第2章₊あるはずのない出会い₊

現世に帰ってきた一護は、己の肉体を取りに行っていた。さすがに、肉体のみ残す訳にはいかまい。

いずれにせよ、死神達が一護の後を追ひ、現世にやって来る筈だ。

「仕方ない…自力で逃げよう…」

肉体に入った瞬間、傷が出来る。

そう言えばそうだったなと一護は思う。

そしてまた穿界門を開き、中へ入っていた。

しかし、これが大きなミスだった…

生身のままで穿界門を開けた事により、ありえない世界へと繋がっていた。

ここは変わった奴が居候しているごく一般的な家庭。
その時、怒声が辺りに響き渡る。

「こらあああつ!!
ボケガエルつ!!」

その声の持ち主は、日向家の長女、日向夏美だ。

「ゲロオ〜か、勘弁であります夏美殿!!」

緑のカエルみたいなのが宇宙人の居候、ケロロ軍曹だ。

ここで、夏美の説教が続く。

疲れ果てた顔で、ケロロは日向家の庭にある同僚のギロロ伍長のテントの中にいた。

夏美から避難していたのだ。

辺りはすっかり闇に溶け、月が辺りを照らしていた。

「夏美殿は何時も我輩に厳しいであります！」

何時もケロロはギロロに夏美の事について愚痴る。

ギロロは鼻で笑った。

「だいたい、お前が悪いんだ。それくらい分かれ。」

サラッと流すギロロ伍長。

その時、テントの外がポウ…と明るくなると同時にズツと来る感覚を一瞬覚えた。

後から伝わってきた、鉄が錆びたような臭い…

反射的に二匹は、外へ出た。

「なんでありますか…!?!」

ケロロ達が見たものは、円の形をした、扉。
ガコン…と音を立てて入口が開く。ひらひらと黒揚羽が舞う。

初めて見る光景にケロロ達はあいた口が塞がらない。
すると中から人が出て来た。

灰色の学ランに身を包み、オレンジ色の頭髪、そして滴る赤黒い液体。

そのままその人は、扉から出た後、力無く倒れた。

「おい、大丈夫か!？」

ギロロが走り寄る。

ケロロも慌てて後を追う。

腹にある大きな刀傷、全身にある切り傷。
凍傷した左腕。

重傷だった。

「ギロロ伍長!早く応急処置を…」
呻き声が聞こえた。

倒れた人が痛みで顔が歪んでいたが、ケロロ達の方を見ていた。

「ケロロは…どこ…だ…？」

口から血が、流れる。

「喋っては、駄目であります!!！」

ケロロがその人の口を封じる。

ギロロがテントから救急箱を持ってきた。

「とりあえず、応急処置をする。おとなしくしろ。」

その人は、目を細め、意識を無くした。

一方、一護は精神世界にいた。

目の前には、相棒の斬月。

斬月が頭を下げる。

「済まぬ…一護…」

お前を…辛い目に遭わせてしまった…しかし、『天解』がなければ…お前は完全虚化に飲み込まれてしまおうと…思ったから…」

「いいよ、おっさん。」

おっさんは、おれの為にしてくれた事なんだ。別に恨んじゃねえよ。」

一護は微笑んで言った。

斬月は、そうかと頷いていた。

内心、ホッと安堵したのである。

「もう行くな。おっさん…」

そう言って、一護は精神世界から出た。

斬月はそれを穏やかに見守っていた。

一護が次に目を覚ますと、緑と赤が目の前にいた。

「良かった。気がついたであります。」

笑いながら緑が言った。

一護は尋ねる。

「…おまえらは…」

「ケロロ軍曹であります！」

こっちはギロロ伍長であります！」

「そうか…助かったぜ。」

俺は黒崎一護。よろしく。」

ケロロと一護が手を取り合う。

これが、ありえない出会いだった。

第3章 傷付いた少年 (前書き)

なんか、編集ミスで、ご迷惑おかけしています。
いろいろと慣れないんですよ…

こんな人間ですが頑張って書いていくので、応援よろしくお願いします！

第3章 十傷付いた少年 十

「さてと、我輩はいろいろと聞きたい事があります!」

ケロロが、一護に言う。

「なんだ?聞きたい事って。」

応答するかのように一護は言う。

「一護殿:あの円状の扉と黒揚羽は一体何なのでありますか?」

ケロロは、最終に見たものを聞いた。

一護は、暗い表情で顔を歪ませた。

それは肩を、震わせた。

「それをかねて、何が遭ったのか、話すよ……」

そう言うと、上半身を起こし、ソファに座った。

「まず、円状の扉は、『穿界門』って言うんだ。この世である『現世』とあの世である『尸魂界』を繋ぐんだ。そして黒揚羽は『地獄蝶』って言って、正式な穿界門を通過するのに必須なんだ。」一護は部屋の片隅に自分が連れてきた地獄蝶を見付ける。

「そして…俺は、それを使って逃れて来たんだ…。異世界にな。」

「逃れて来た？」

冬樹がそう聞き返す。

そこへ、赤髪の少女が入ってくる。

日向夏美だ。

「…俺は、罪を被せられた…!!
それだけじゃねえ…仲間まで傷つけられた…何も、護れなかった!!
ただ…俺に迫って来る刃を避けるのに…いっぱい…悔しかった…!!」

逃げるだけの自分を呪いたいと思った!!」

一護は歯を噛み締める。

目頭が熱くなっただが、それを懸命に耐えた。

最後は一護の心からの悲痛の叫びとなっていた。

しばらくの重い沈黙…それを破ったのは、少女だった。

「つまりは、冤罪なのに仲間から敵視され、追われる者としてこっちに逃げてきた訳ね…身体もろとも傷付いて…」

少女は一護の前にしゃがみ込む。

「大丈夫。たとえ、身体は護れなくとも、一護さんの心は、私達が護ってあげるから…そんな重大な事…一人で背負わなくていい。

此処にしばらくいて、身体も心も安定させればいいのよ。」

冬樹も、聞いたことのない、姉の優しさ。
励ましの言葉。

「夏美殿！
ならば、一護殿は…我々と一緒に…」

ケロロが驚いたかのような表情を浮かべる。

「勿論よ。後からママに言うておく。それに…」夏美が一護を一瞥する。

「困った人を放っておけないから…」

一護はこの時、思った事があった。

いい奴らに救われた…と。「名前、言ってなかったね。私は日向夏美。」

「ああ…礼を言わせてくれ…あの時、ケロ口達が拾ってくれなかったら、俺はそのまま死んでいたかもしれなかった…ありがとう。おまえらのお陰で、俺は救われた…」

にっと微笑んだ。

「よろしく！一護さん！！」

みんなと握手してもう一度挨拶を交わした。

しばらくして、夏美がケロロ達を指差す。

「ところで一護さん。

ボケガエルを始めて見たとき、驚かなかったの？
こうみえてコイツ、宇宙人なのよ。」

「…宇宙人が…」

じゃ、ケロロ達は何処から来たんだ？」念のため聞いてみる。
ケロロは敬礼と言う。

「我輩は、ガンマ星雲第58番惑星宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊隊長、
ケロロ軍曹であります！」

…しばらくの沈黙…

「はい？」

一護が呆気ない声をあげる。
聞き慣れない単語をズラズラと並べられても、頭が追い付くはずがない。

「まあ…驚いたは、驚いたけど…失礼かと、思ったからさ。
リアクションを取らなかつただけだ。」

はは…と空笑いをする。

夏美はとりあえずと言い立ち上がる。

「確か…空いてる部屋はなかつたっけ？」

「いいよ。そんなに気遣わなくても。俺はこのソファで寝るから。」

夏美は申し訳なさそうにゴメンと呟いた。

「それにしばらくは身体は動かせなさそうだし。」

恐らく、体中に負った傷の事を言っているのだろう。

「早く治るといいね！」

笑顔で夏美は言つとリビングからでていく。

こうして日向家とケロロ達、そして傷付いた少年の日常が始まった。

しかし彼等は知らない。

とある計画を進める組織が動き始めていることに…

第3章 傷付いた少年 (後書き)

やっとケロロ達の日常(?)がま始まる？

これから戦闘も入って来ると思います。

いや〜ぶつちやけケロロ達が戦闘なんて…想像つかない(笑)

それに書いていて思ったのですが…ケロロ軍曹のキャラの口調をよくしらねえ…!!

なんか多少ズレていてもそこは勘弁してください。

この小説における設定（前書き）

大きく変わっているのは一護のみなので、細かい設定は一護のみとさせていただきます。

この小説における設定

名前

黒崎一護

年齢

18歳

身長

186センチ

(父である黒崎一心と同じ)

体重

68キログラム

能力

〔肉体に入っている時〕

フルブリンゲ
完現術

・物質に宿る魂を引き出す。よって、水を浮かせたり、空気上で活動可。

戦闘においても応用を効かせる。

・鬼道

咏唱破棄(殆ど)

治療も出来る。

鬼道に関しては死神の時よりは威力が少し衰えるが、虚ていどならば一発で吹き飛ばす。
〔死神代行〕

斬魄刀：斬月

特徴

身の丈程ある大刀。
包丁を拡大したような物。また、柄には、布が巻かれている。背中に背負う。
常時解放型。
霊圧のオーラは青白い。

卍バンカイ解

斬魄刀の名は天鎖斬月。

特徴

漆黒の少し長めの日本刀。柄尻には、漆黒の鎖が垂れ下がっている。オーラが変色し、赤黒くなる。
死覇装が変化する。
また、鐔のデザインは『卍』を模っている。
ここで始めて虚化ホロウカ可能。
仮面は左右どちらとも赤い線が縦に一本ずつ入っている。
顔のみを覆う。

天解テンカイ

斬魄刀の名は無月。

髪が黒くなり、長くなる。

顔と上半身は包帯(?)で巻かれている。右腕は天鎖斬月と一体化し、鎖が巻き付いている。
鍔も細くなる。

完全虚化

仮面が後頭部まで覆い、角が生えている。

そこから虚閃テロを放つ。色は赤。
威力は絶大。

また、髪は腰辺りまで伸びる。

しかし、身体には髪以外変化無し。

ケロロ軍曹達については、原作通り。

(いじるところが無いから…というよりいじらない方が良いかもしれない。)

この小説における設定（後書き）

終わった〜

設定だけで疲れた（*、*） || 3

文章力が低すぎて、想像しにくいとは思いますが、そこは勘弁してください。

第4章 \pm ケロ口達の秘密基地入口 \pm (前書き)

皆様こんにちは！

寒月牙斬です。

皆様からたくさん感想を頂き感謝しています。
分かりづらい文章ですがよろしくお願いします。

第4章 ㊦ケロ口達の秘密基地入口 ㊦

あの日から、数日経った。

ケロ口達は、一護の回復力には驚かされた。

「…はあ…」

冬樹と夏美は、学校があるため不在。

ケロ口達は、行方不明。

居候させてもらっているので、一護は軽く買い出しに出掛けていた。

まだ、傷は完全に塞がってはいないが、多少の歩き程度なら大丈夫と言っことなのだ。

「それにしても、此処はあっちと違って平和だな…」

のんびりと歩き、空を見上げる。

なんせ、虚という化物がないからだ。

それさえいなければ、平和だろう。

「…はあ…」

溜息をついて帰路につく。

―日向家―

「ただいまー」

―護はそう言ってリビングに向かう。

ソファ―に座ると自分の腹に手を置く。

すると、エメラルドの光が優しく、掌から放たれる。

―護の回復力が早いのは、自ら治療していたからだ。

しかも、誰もいない時に。その時、バァンっ！！と勢いよくリビングのドアが開かれる。

―護は慌てて治療を断念する。

そこにいたのはケロロと…

「…誰だ？」

黒い固まり。

ケロロの同類だろうか。

「一護殿にはまだ紹介してなかったであります。タママ二等!!新しい居候であります!!」

「はいです!

僕はタママ二等兵です!!」

「…ケロロ。コイツはギロロと同じような関係…か? まあ、いいや。

俺は、黒崎一護…で、どうしたんだ?おまえら。」

用を尋ねると、いきなり、ケロロが左腕を掴む。すると衝撃的な痛みが身体をはしる。鋭い痛みで顔を歪ませる。

「ケロロ…そっちは、凍傷したところだぞ…」

静かに、どすのきいた声でそう言うと、ケロロは、慌てて手を離す。

「日向家御一家には知られてしまっているので、一護殿にも紹介し

たい所があるのであります!!」

パツと敬礼してケロロは言う。

「紹介したい所？」

それって、何処だ？」

タママがちよんと一護の肩に乗る。

「僕達の秘密基地ですう。」

「と、いうわけで一護殿!

我々について来るであります!!」

玄関にある黒い、小さな物体の前に来た。

「これってなんだ？」

見るからに、人が入るには小さすぎる。

ケロロは黒い物体の表面を押すと、それは音を立てず静かに開いた。中に入ると梯子がついていて、下に続いている。

長身の一護は少し苦勞しつつも梯子をつたって下へ降りて行く。

下に降りると、ドアが一つあった。

そこを開けると、広々とした部屋があった。

「へえ、この部屋広いな。」

一護は小さく感心したように言うと、ケロロ達は、星がついた白い物体の前に立っていた。

「これは…?」

ケロロが自信満々に言う。

「これが、我輩の秘密基地の入口であります!!」

第4章^キケロ口達の秘密基地入口^キ（後書き）

まだまだだな…

とにかく、悪い点を改善してより良い小説を目指していくので、アドバイスがあったら、気ままによろしくお願いします！

第5章 秘密基地の内部 (前書き)

皆様、お久しぶりです。

こっちの都合で、なかなか手付かずでした…。

感想&レビューをお待ちしてます！

第5章 秘密基地の内部

ちよこんと置かれた白い物体の前に立ち止まるケロ口達。

「…なんだ、これ？」

一護が問う。

明らかに入口には見えない。

「だから、入口であります！」

「……………」

一護は疑い気な目でケロ口を見る。

ケロ口は合図も無しにそれを開く。

「だから……………」

言いかけたときだった。

「うおおおおお……？」

物凄い吸引力で一護は、白い物体に吸い込まれて行った。

「我輩等も行くであります！タママ二等！」

「はいですう〜！！」

そういつて二人（二匹？）も中へ入って行った。

「おぶう！？」

顔を床にぶつけ、変な声をあげた一護。
あまりの痛みに顔を摩る。

「どこだよ、此处……」

立ち上がり、辺りを見渡す。

「しつつかし、ホントにすげえな、此処は…」

ぼつりと独り言を漏らすと、歩き始める。

「…ケロ口達は？」

肝心の案内人ガイドがいない。

「…仕方ないか…」

ゆっくりと歩き始めた…が…

「…なんだ!？」

明らかに地球上の生物ではない
化け物の声が聞こえる。

そしてそれはどンドン近付いて来る。

一護の背後に、巨大な影が現れる。

一護はゆっくりと後ろを振り向いた。

目の前には黒い、大きな犬。
軽く3メートルは超えている。

「ぎゃあああああつつつつつ!!!?」

一護の断末魔が響いた。
そして一気に走り出す。

逃がさまいと化け物は一護の後を追いつけて来る。

「来んな、来んなあああつつつつつ!!!」

必死に叫ぶが、全く言うことをきかない、化け物。
…当たり前だろう。

一護は、後ろにいる化け物を一瞥し、舌打ちをする。

(…どうすればいいんだよ…!!?
何か、方法は…鬼道じゃ、駄目か?)

試しに使ってみる事にした。

「あんまり、使いたくないけどな…仕方ない。」

一人で納得した一護は、化け物の方を見、人差し指を化け物に向ける。

「縛道の一、『塞』（さい）！！」

一番弱い鬼道をかけてみた。

「がぎやああああ！！！！」

…効果、抜群。

「よし、今のうちだっ！！」

そして、一護は全力で化け物から逃げ切った。
一方、ケロロ達は…

「一護殿！どこでありますか？」

懸命に探していた。

「いっちは、何処に行っただんですか？」

タママも心配している。

その時だった…

「ぎゃああああああっ！！！！？」

一護の断末魔が聞こえた。

「軍曹さん！！あつちですう！！！」

ケロロ達は声がしたほうに向かって行った。

「…はあ…た、助かった…」

息を整える一護がいた。

全身、汗だくだった。相当、必死に逃げてきたのだろう。

「もう勘弁しろよな…此処はとんでもない所だな…」

そう呟くとある部屋に入って行った。

一護が入った部屋には、椅子が五つと巨大なモニターがあるだけの広い部屋だった。

「なんだ、此処は？」

一護は辺りをキョロキョロと見渡す。

「此処は我輩等の会議室であります！」

後ろからケロロの声が聞こえた。

「会議室？」

広い割には、椅子が少な過ぎる気がするが…」

一護は疑問に思った事を口にする。

「椅子はそのくらいで十分でありますよ。」

黙っていたタママだが、目の前に蠅が飛んでいた。

そしてそれは、タママの鼻に止まった。

プッ
ッ
ッ

何かが切れる音が、した。

「タママインパクトオ!!!」

凄い形相で黄色い閃光を発射した。

その閃光が向かう先には…一護がいた。

「一護殿!!!」

ケロロが一護の元へ駆け出す。

しかし、ケロロの足より光線の方が速い。

「……………!!!」

ズドンッ!!!と轟音が轟いた。

砂埃のせいで視界が悪くなる。

ケロロが咳込む。

タママは凄い形相のまま、肩で息をしていた。

「タママ二等!!」

何をしていますでありますか!?

一護殿が巻き込まれたであります!!」

ケロロはタママに怒鳴った。

本人は驚いた表情を浮かべていた。

ようやく視界が晴れてきた。

そこに立っていたのは、無傷の一護だった。

一護の前には、巨大な壁が張られていた。

「危ねえ…危うくもろに喰らっていた所だった…」

「一護殿…それは一体、何なのでありますか？
何処から出したのでありますか…？」

ケロロは壁を指差し、問う。

一護は壁を割り、ケロロ達を見る。
そして、口を開いた。

「『鬼道』…この技の名前だ。そして、縛道の八十一、『断空』。
さっきの壁の名前だ。
他にもいろいろあるんだけどな…数が多いから、また今度な。」

そう言うと、にっと微笑んだ。

ケロロの地下を案内し終え、戻ろうかと話をしていた所だった…

「!？」

ケロロが反応する。
続いて、タママも。

一護は不思議に思い、首を傾げた。

「おい、どうしたんだよ……二人揃って……早く、帰ろっ……」

言いかけているとき、爆発音が聞こえた。

第5章 秘密基地の内部 (後書き)

やっと1章を書き終えた…疲れた(*´、*´) 3

更新は不定期ですが、よろしくお願いします。
かなり、ペースも遅いです。

第6章 † 迷惑な幼なじみとウサギ † (前書き)

お久しぶりです。

しばらくケイタイを親から没収されてました(泣)

お陰で遅くなりました。

第6章 † 迷惑な幼なじみとウサギ †

いきなりの爆発音。

砂埃が舞った。咳込む一護は、目を細めて言った。

「次は、何だよ!？」

「わからないであります!

我輩もさっぱり!」

その時、砂埃から笑い声が聞こえた。

「はーはっはっは!」

ケロロの顔は煌めく。

「この声は…」

タママもニッコリ笑う。

砂埃が静まり、視界が広がる。

そこには…一人の男。

「コゴロー殿であります!!」

笑った表情でコゴローという男は、ケロロと仲良さそうに喋り始めた。

一方、ぽかーんと立ち尽くす一護。
タママは一護のかおの前で手を振る。

「…あいつ、誰なんだ？」

一護がボソツとタママに聞く。
タママは満面の笑みで答える。

「軍曹さんの幼なじみですう。」

そうやって二人は、楽しそうに喋るケロロ達を見ていた…が。
コゴローが一護の存在に気づく。
ビシッとコゴローは一護を指差す。…表情は、変わっていない。

「そこの凶悪宇宙人!!」

この宇宙探偵、コゴローがお前を此処から追い出してやる!!」

「はぁ!？」

一護はいきなり敵視されたことに困惑する。
そしてコゴローは一護に殴りかかった。
それをぎりぎりにかわす一護。

「な、なんだよいきなり!!
俺、なんかあんたに危害を加えたか!？」

コゴローを指差して怒鳴る。
顔には青筋を浮かべていた。

「お前はケロロに催眠術をかけ、ケロロを狙いに来ただろう!？
そんな宇宙人は、俺が許さん!!」

「催眠術なんて、かけたりしねえよ!!」

一護は完璧に不機嫌モードになる。

「癒着！！」

コゴローが、叫んだ。

「癒着…って、臓器や組織が炎症を起こしてくっつく意味じゃ…」

「一護よ、そんな呑気に意味を気にしている場合では無いと思うぞ…」

コゴローの頭にはバイクのライダーが被りそうなヘルメットがあった。

「…なんだよ、あれ？」

素っ気ない質問をする一護。

コゴローから青白い刀(?)が出て来る。

「レーザー竹刀!」

その刀はレーザー竹刀というらしい。

コゴローは竹刀をおもいきり振り上げ、一護に向かって振り下ろす。

「うおっ!」

一護は慌ててそれを避ける。

「なかなかやるじゃないか、凶悪宇宙人よ!とう!」

コゴローは高く跳び上がった。

一護は、どうしようか迷う。

(確か、コイツはケロロの幼なじみじゃなかったか…?…よし。)

そこで一護は逃れるための手段を実行した。

コゴローは一護に向かって攻撃を繰り返す。

一護はそれを避けながら友人に訴える。

「ケロロ!」

お前が、俺が敵ではない事を証明してくれ!!」

ケロロは頷くと、コゴローに言い放った。

「コゴロー殿！彼は敵では無いであります!!
だから…攻撃は止めるであります!!」

ケロロはこれで分かってくれただろうと思った…が。「騙されないぞ!!」

もしか、お前はケロロに化けた凶悪宇宙人か!？」

今度はケロロにも標的を向けた。

「ゲロオ〜!？」

コゴロー殿、これは何かの間違いであります!!」

「覚悟しろ、凶悪宇宙人!!」

…聞く耳持たず…

「ちっ!!…どうやらコイツには聞く耳を持っていないようだな…
ケロロ!目をつぶっている!!」

掌をコゴローに向けて言った。

「一瞬で終わらせてやる!」

やがて、掌には青白い光が溜まっていく。

「破道の三十三、『蒼火墜』!」

ズドン!と勢いよく青白い光は発射された。

コゴローはそれを竹刀で受け止める。

しかし、それは消えるどころか爆発した。

「…許してくれ。」

一護は目を細めて言うと、ケロロに「目を開けてもいいぞ」と言った。

「…一発、打ち囓ませた。」

これで大丈夫だと思うが…」

一護は、コゴローの方を見た。
砂埃が舞っていてよく見えない。

「大丈夫。死にはしねえよ。

力を抜いたからな。

第一、あいつは簡単には死ななさそうだしな……」

ケロロはコゴローの元へ駆け出した。

幸い、コゴローは頭がアフロになっただけで済んでいた。

「はーはっはっは……」

力無く笑う。

表情は…変わらない。

「お兄ちゃん!!」

そこへ見知らぬ女性がコゴローの元へ走ってきた。
頭にはうさぎ耳。

「ごめんなさい、ごめんなさい！兄が迷惑をかけて…」

女性が必死に頭を下げる。

ケロロは宥めるように言った。

「ラビ殿。謝る必要は無いでありますよ。何時ものココロ殿であります。」

「しかし…」

うるたえるようにラビという女性は言った。

「…ケロロの言う通りだぜ。
むしろ、俺のほうが悪かった。」

一護は、頭を下げた。

ラビは、「この人誰？」といったげそうな表情を浮かべている。

「あつ…悪い。俺は黒崎一護。ケロロ達と同じく、この家の居候だ。」

簡単に自己紹介をする。

「ラビといいます…あの人の妹です。」

ラビも自己紹介をした。ラビは兄が心配になったのか、傍に駆け寄った。

そして、ラビを通じて一護とコロコロも名を名乗り、敵ではないことを示して一見落着いた。

二人と別れた後、タママは一護に尋ねた。

「そういえば何故、僕の『タママインパクト』を止められたんです
う?」

『断空』について尋ねて来た。

「なんでだろうな…それが鬼道の一種だと身体が判断したからじゃ
ねえの?」

「ふうん」

曖昧な答えで話題は終わった。タママもそれ以上聞く事はなかった。
そして、他愛のない会話をしながら外へ出た。

第6章 † 迷惑な幼なじみとウサギ † (後書き)

やっと書き終えた…

まだまだ続きますが、よろしく願いします！

感想、レビューを受付中です。

第7章 キケゼロ小队との対面「前編」 キ（前書き）

またまた更新が遅くなりました。亀更新ですいません？
今回は長いので、前半と後半に分けました。

文も内容もグダグタですが最後までお付き合い下さい。

第7章 ㊦ケロロ小队との対面「前編」 ㊦

「暇だな…」

コゴローとの戦闘（？）のせいで傷口が少し開いてしまったため、またまた治療のやり直しをしているところだった。

ちなみにケロロとタママは会議があると言って空けている。夏美と冬樹はまだ学校から帰って来ていない。そのため、一護は鬼道で治療していた。

「…もう5時か…」

そろそろ夏美達が帰って来るな。」

治療を断念したところでへとへとになった冬樹が帰ってきた。

「ただいま。」

「おう！おかえり。」

現在、冬樹は吉祥学園に通う中学二年生。部活はしていない。

「そういえば、一護さんっていくつですか？
それって、明らかに学生服ですよね？」

一護は空座高校の学ランを着ていた。
一護は平然と答える。

「…高3だ。」

「…ひとつ、お願いがあるんですけど…いいですか？」

「この問題はこれをXとおいて…」

勉強（課題）を教えるて欲しいという頼みだった。
今、冬樹がやっているのは数学の連立方程式。

「……………これで、答えが出る。」

なんとか、全て解き終えたようだ。

「ありがとうございます！
おかげで助かりました。」

「いや、いいよ。俺もこれくらいしかできねえし。」

一護と冬樹は姉の夏美を待っていた。
6時をまわったところで夏美が帰ってきた。

「ゴメン！今から夕飯を作るから！」

バタバタと慌てる夏美。…見ていて危なっかしい。

「…じゃあ、俺はケロロ達に知らせてくる。」

一護はケロロ達の秘密基地へと向かった。
秘密基地に着いた一護は気を張り巡らせてケロロを捜す。
ふと、あることに気づく。

「…なんで、霊圧を感じるんだ？」

一護が感じたのはケロロ、ギロロ、そしてタママの霊圧とその他知らない霊圧が三つ。
その方向は、あの会議室。

「…行ってみるか。」

そう言って、一護は会議室へと向かった。

一方、ケロロ達はというと…

「今から地球侵略^{ベコボソ}作戦を話し合つてあります！」

彼等…『ケロロ小隊』は地球侵略しにきた宇宙人である。

何度もこのように地球侵略の作戦を立ててきたが、地球の防衛こと日向夏美に何時も阻止され、未遂に終わるのである。

流石にギロロはいつも呆れてばかりいる。

ケロロが作戦の内容を口にしようとしたときであった。

ウィーン…

会議室の自動ドアが開く音がした。

「侵入者が…？」

ぱっとケロロ達はドアの方を振り向く。

しかしそこには、知った顔があった。

「…あれ？」

一護であった。

沈黙…

「…数が増えているような気がする…」

ボソツと呟くと、一護はケロロを見た。

流石にいくら相手は一護でもこの作戦はばれたくなかった。

「一護殿！少し眠って頂くであります！！」

ぱつとケロロは一護に飛び付いた。

「うおっ！？」

それを一護は、ひよいとかわす。

ケロロは顔面から地面にぶつかつた。

「なかなかやるでありますな…一護殿…」

たった一回地面にぶつただけなのに顔は腫れて、出血していた。

見た目はホラーだ。

「いや、意味分かんねえよ!!」

一護は、そう言つとタママの方を見た。

「タママインパクト!!」

あの閃光が一護に迫る。

一護はあのと看と同じように鬼道で防ごうとするが…
また、ケロロが一護の元に走ってくる。

「ゴメン、ケロロ!!」

一護はそう叫ぶと、タママインパクトをぎりぎりまで引き寄せ、ケロロがきたところかわす。

「ゲロオ〜!!」

見事に、タママインパクトがケロロに直撃。
ケロロは頭がアフロになり、黒焦げになった。

「おじ様!!」

そう言った女は、ケイタイを取り出した。

ケイタイは変形し、それはハンマーみたいなものになった。

「ハルマゲドン!!!1/1000!!!」

かなり割られるが、ハルマゲドンは、地球を真っ二つに割れる程の威力があるのだ。

「なんだよ、あれ!?!」

一護は、フルプリング完現術を使って上へ跳んだ。

ズドン!と物凄い衝撃が響き渡る。

一護はそのせいでバランスを崩し、着地に失敗した。

その時、反射で左手をついてしまったため激痛が体中を走る。

顔を歪ませ、痛みに耐える。

「くっ!!!」

おい、人の話を聞け!!!」

そう怒鳴るが、頭がアフロになったケロロは言うことを聞かない。

「我々の作戦を聞かれました以上、此処で排除しなければなら

ないのであります。」

「ふん…いつもは違う癖にな…」

ギロロがぼつりと呟いた。

「どうやら…分からせるしかねえようだな…」

一護は笑みを浮かべ、身構えた。

いざというときの為に、死神代行証も持っている。

ギロロが銃を構えた。そして、一護を撃つ。

しかし、一護は完現術を使い見事にかわす。

人間離れした動きにケロロ達は驚く。

そして一護はギロロの目の前まで来た。指先をギロロの腹に向ける。

「破道の一、『衝』。」

軽い衝撃波がギロロを吹き飛ばした。

ギロロの小さな身体は吹き飛び、壁に激突した。幸い、気を失っただけですんだ。

次に現れたのは、タママだった。物凄い形相で、こちらに向かって来る。身体全体が膨らんでいる。

「タママインパクトオ!!」

再び放たれる閃光。

「縛道の、八十一、『断空』！」

目の前に巨大な壁が現れる。それはタママの攻撃を遮った。

一護は掌をタママに向けた。

「破道の三十三、『蒼火墜』！」

青白い閃光が放たれた。

しかしタママはぎりぎりのところで避ける。

「危なかったですう。」

その際に一護はタママの背後に迫った。
気づいた時には既に遅し。

「縛道の一、『塞』。」

突如、タママは後ろから拘束される感覚に見舞われた。

「痛いですう！」

「我慢してくれ。」

「これが終わるまでな……」

一護はタママを担ぎ、目を細めて言った。

タママを隅に置くと素早く移動し、様子を伺う。

次は、青と黄色だった。

第7章 キケロ小隊との対面「前編」 キ（後書き）

現在、感想等を受付中です。

これからもよろしくお願ひします。

第8章 キケゼロ口小隊との対面「後篇」 キ（前書き）

前回は引き続きの投稿。

今回はかなり短めです。

では、どうぞ。

第8章[†]ケロロ小隊との対面「後篇」[†]

「あんたらは…」

始めてみる二人に一護は静かに尋ねた。

「拙者は、ドロロ兵長で御座る。」

「俺はクルル曹長だぜくくくっくっく…」

怪しい笑い声をたてるクルル。

「…んで、どうするんだ？」

「隊長の命令には、従うしかねえじゃないの〜？」

しかし言葉とは裏腹に、クルルは背を向ける。

「まあ、俺は興味無いからいいけどな〜くくくっくっく…」

立ち去るクルル曹長。

一護は仕方なく、ドロロを見る。

「あんたは…一言で言うと、忍だな。」

ドロロは、後ろにさしている短剣を抜いた。

「そなたのおっしゃる通りで御座る。」

そういつてドロロは、真つ正面から一護に襲い掛かる。

「忍にしては随分と攻撃が正面過ぎじゃねえか!!」

そう言うと一護は完現術を使い、瞬時にドロロの背後に回った。

ドロロはこれを予想していたかの様に素早く跳び上がった。
動きは、物凄く速い。

一護の足は、空をきる。

「…成る程な…流石、忍といえる。さっきの動きはよかったぜ。」

「そなたも、動きが一般人ではないで御座る!!」

素早く手裏剣をいくつか投げる。

一護はひとつひとつ全ての手裏剣を避けていく。

次にドロロは、クナイを投げた。

一護はそれも避けて、ドロロの目の前に迫る。

ドロロは危険を察したのか、後ろに跳び退いた。一護はドロロに人差し指を向けた。

「縛道の六十一、『六杖光牢』！」

たちまちドロロはそれを避けきれず、身体に六花が刺さった。身体を動かす事が出来なかった。

「しまった!!」

「破道の一、『衝』」

そのままドロロは床にたたき付けられた。

一護は、タママとドロロにかけて鬼道を解いた。

しかし、それが間違이었다。

いつの間にか復活していたギロロ、ケロロを加え女の合計五人が一

斉に攻撃を仕掛けてきた。

一護は顔に青筋を浮かべて怒鳴った。

「てめえら…人の話を聞けって言っているだろお!!」

「破道の八十八、『飛竜撃賊震天雷砲』!!」

青白い閃光がケロロ達を飲み込んだ。

全員、頭がアフロになって横たわっていた。

ふう…と一護は溜息をついた。

左腕に激痛が残る。

無理をしたのだろう。お腹の傷も開いてきていた。

これより長ければ、確実に傷口が開いていただろう。

「…おい、大丈夫か…」

一応、声をかけてみる。

ケロロからは随分と元気な声を上げて、返答する。

「はっ…我輩は何をして…」

どうやら、先程までの記憶が無いようだ。
はぁ…とまた溜息をつく一護。

「…飯、出来てるぞって夏美から。
それを言いに来ただけなのに…はぁ…」

落胆した一護。ケロロが一護の左腕をみた。包帯に血が染み付いて
いた。
指先からはばたばたと血が滴り落ちている。

「一護殿！！左腕が…」

「別に何ともねえよ…それより、早く上に上がるぞ。腹減ってしよ
うがねえ。」

強がっているのがよく分かった。
額には、尋常ではないほど汗をかいていた。
痛みを堪えているのだろう。

「一護殿…後で治療をし直すであります。」

「…仕方ねえな…」

タママ達は、各自で帰って行った。
ケロロと一護は二人並んで、夏美達の所へと帰って行った。
何とか、左腕を見られずに済んで、夕食を食べ終えた一護は、ケロロの部屋へと向かった。

「悪かったな…怪我はねえか？」

一護は秘密基地のことを謝っていた。
どうやら随分と気にしていたらしい。

「我輩こそ…ごめんなさいであります。」

ケロロも頭を下げた。一護はふつと笑った。

「いいぜ、ケロロ…これらがあつたから、お前の仲間に出会えたんだ。
もう気にしなくていいぜ。」

「いっその事、お互い悪かつたて事で。」

そのあと、一護とケロロは他愛のない会話を弾ませていた。
家族のことや、一護が来る前の日常生活等…

上から、冬樹の声が聞こえた。

「どうやら、二人を呼んだらしい。」

ケロロが返事をする、二人で上に上がって行った。
ここで一護がボソツと独り言をもらした。

「ドロロとクルルに名乗るの忘れた…」

「それはまた今度でいいであります！また会えるであります！！」

「…そうだな！！」

続いて、夏美の音がする。

「今、行くであります！」

一護とケロロは互いに笑いあいながらケロロの部屋を去った。

第8章 ㊦ケロロ小队との対面「後篇」 ㊦（後書き）

はい、かなりのグダグタでした…

戦闘描写は難しい。

もっと練習します（泣）

感想等お待ちしております。

次回は、尸魂界の話を入れて行こうかなと思います。

第9章 目的 (前書き)

はあ…ケイタイが悲鳴を上げている…!!
もうすぐ買い替えないと…

感想お待ちしてます。

今回もかなり短めです。

第9章 目的

場所は変わり、尸魂界。

尸魂界の中心地…『瀟霊廷』では、行方を眩ませた一護の搜索でバタバタしていた。

そんななか、一人佇む者がいた。…ルキアだった。

「一護…」

そつと、名を呟いている。

静かに目を伏せた。

「一護…貴様は本当に我々を裏切ったのか…？」

脳裏に浮かぶ残酷な映像。

横から見た一護の顔は、余りにもあの本人とは言い難かった。

「…私は…何がしたいのだろうか…」。

仲間を簡単に裏切り者だと判断して攻撃した…私は…最低だ…!!」

頬には一滴の雫が伝う。

「絶対、あれは一護ではない。早く見つけて謝らなければ……!!」

そう言つて、現場に戻ろうとした時だった。

「…あんたの言う通りだ。」

知らない声が背後から聞こえた。

ルキアは後ろを振り向く。

「…誰だ!?!」

腰にさした刀に手をかける。

現れたのは、真っ黒な着物を着た一人の男。

「はじめまして…死神さん。」

「貴様…何者だ…答えろ!」

ルキアが怒鳴る。男はやれやれと言った様だった。

「…この事件の真相を知っている者…と答えたら?」

ルキアは目を見開く。

「…なんだと…!?!」

「本当の事に気付いた君だけに教えてあげるよ。…全て。
だからさ、刀から手を離してくれないか？」

恐る恐るルキアは戦闘体制を解いた。
そして目の前の男を睨んだ。

「…まず、僕は西院聖^{サインコウキ}。」

「朽木ルキアだ。」

「今、黒崎一護は何処にいると思うっ?」

唐突な質問。

ルキアは首を傾げた。

「今、搜索中だが…」

聖は、はあ…と溜息をついた。

そして、こう言った。

「黒崎一護は永遠に見つからない。」

ルキアは、冷静に目の前の男の口から出る言葉ひとつひとつを聞く。

「…なんの根拠があってそう言い切れる…?」

目を細めそう言った。

「今、黒崎一護は…此処から隔離された世界にいる。

そしてその通路は俺等が完全に断ち切った。

…言っている意味、わかるだろ?」

ルキアは信じられないと言いたげそうな顔を浮かべた。

「俺達の目的は…『天解』を力にした者を使って復讐することだ。

…此処、尸魂界にな。」

「やはり、真犯人は貴様か!」

ルキアは、男に斬り掛かった。

「言い忘れたけど……」

男が一瞬、消える。

気付いた時には、体中に激痛が走った。

ルキアは男に刺されていた。

「くはっ……」

ルキアは力無く倒れた。

男…聖は、静かに笑った。

「後悔するがよい…黒崎一護を此処から追い出した事によって、世界滅亡への道を進んでしまった事にな!!」

そう言って、気を失ったルキアを残して立ち去った。

第9章 目的 (後書き)

次回も楽しみにしていただけると光栄です。
感想をお待ちします。

第10章 † 現世組と合流 † (前書き)

皆さん、お久しぶりです。

携帯がついにぶっこわれました(泣)

そのせいで全く手をつけられませんでした…

また、今は試験前ということなのでまたしばらく更新を停止します。
毎回、すいません！

第10章 現世組と合流

「…此処は…？」

先程、聖に刺されたルキアが目を覚ますと、白い天井が目映る。

「そうか…私は…」

聖の声が頭のなかで何度も繰り返す。

そして、あの真実。

『黒崎一護を見つけたのは不可能だ。』

『奴は、隔離された世界にいる。』

耳を塞ぎたくなった。

そして、もう一度彼に会って、確かめたい事があった。

「…一護は、元気になっているのだろうか…？」

「…一度、現世に行つて井上達にこの事を伝えなければな。」

ルキアは、そう言うと、きれいにたたまれた死覇装に手を伸ばした。現世に到着したルキアは、真つ先に元十二番隊隊長、浦原喜助が経営する『浦原商店』へと向かった。

「浦原！！」

ルキアは呼び捨てで呼ぶ。奥から「はいはい」と呑気な声が聞こえる。

「いきなり、どうしたのですか？朽木サン。」

片手に扇子を持ち、帽子を被つた男が出て来た。

「…井上達を呼んでくれ。」

話がある。」

浦原は、うつすらと笑みを浮かべた。

「分かりました。直ぐに呼んできます。」

そう言うと、浦原は、襖の奥へと消えて行った。
しばらくすると、滅却師クインシーの石田雨竜、人間でありながら特殊な能力を持つ茶渡泰虎、井上織姫が顔を出す。

「朽木さーん!!」

織姫が元気良く、ルキアに挨拶する。

「久しぶりだね、朽木さん。」

眼鏡を押し上げて雨竜も挨拶をする。

「…ム…」

チャドこと泰虎も軽く片手を上げる。

彼等は一護も含め、『現世組』と呼ばれている。

浦原も含んで、五人はちゃぶ台を囲むようにして座った。

「浦原さん、話って何ですか？」

雨竜が尋ねる。

浦原はちらりとルキアを見た。

「話があるのは、朽木サンからっす。」

四人はルキアの方を見る。

「…実は…」

ルキアは尸魂界で起きたことの経緯や一護の失踪について話した。

「黒崎くんが…!？」

織姫が口元を手で押さえて言った。

雨竜も信じられないと言っているような表情を浮かべる。

浦原も初耳のようで、目を見開いていた。

「しかし…私は、あのことが信じられなかった…だから、あれは一護では無いと信じて探したのだ…そしたら、一人の男に出会った…」

『西院聖』…奴は言っていた。

『一護は…此処に戻って来るのは不可能だ』…と。

辺りは重い空気に包まれる。

口を開いたのは浦原だった。

「では…その『西院聖』が犯人…と？」

ルキアは頷く。

「奴は…自分が真犯人だと言っていた。

ならば、こちらがその男を搜索して、一護の行方を掴むしかない。奴はきつと、まだこの世界に居るはずだ。」

雨竜が首を傾げる。

「この世界とは…現世に居るといふことか？」

ルキアは首を横に振った。

「もう一つ、重要な事がある…。
一護は

此処とは隔離された世界に居る。」

「もう、直接に一護を発見するのは不可能なのだ…
既にその経路は絶たれている。」

「じゃあ、どうすれば…」

織姫の顔からは、『絶望』という二文字が浮かび上がる。
ルキアは一度目を閉じ、そして言った。

「…だから、言ったであろう…一護を掴むのではなく、『西院聖』を掴むと…」

奴は真犯人で、さらに隔離された世界の経路を絶った奴だ。繋げることも可能だろう。」

「尸魂界に行こう!!」

雨竜が立ち上がる。

三人も立ち上がる。

浦原は扇子で口元を隠した。

「分かりました。

穿界門を準備しますね。」

浦原は、地下にある勉強部屋に向かった。

四人は、尸魂界へと出発した。

第10章 現世組と合流 (後書き)

多分、次の更新は再来週辺りになると思います。

書き上がっていればの話ですがね…そろそろ勉強しないとマジでやばいです。

と、いうわけで皆さんまた今度また会いましょう！

第11章 日向家の母（前書き）

遅くなりました…

テストの結果が相当やばくて、再テストや訂正ノートを作っていたら、こんなに月日が経っていたなんて…

また題名の通り、日向家の話しに戻ります。
感想等、受付中です。

第11章 日向家の母

そんな騒がしい尸魂界とは裏腹に一方、こちらは日向家。
日向家は今日も平和だ。

そんな中、日向家の電話が鳴る。
それに気付いた夏美が電話を取った。

「もしもし…ママー!!」

どうやら母からの電話のようだ。

「…うん、わかった。じゃあね。」

そう言って電話を切る。

夏美はご機嫌でリビングに入った。

「冬樹〜!!」

ママが今日、急遽帰れるんだって!!」

それを聞いた冬樹も自然と笑顔になる。

「わふう〜!!」

楽しみであります!!」

ケロロも跳びはねる。

そんな中、困惑する者が一名。

日向家の母を知らない一護であった。

「そんなに珍しい事なのか…?」

一護が恐る恐る聞いた。

夏美がそんな事も気にせず淡々と答える。

「ママは編集部で働いていてね。忙しいからあまり帰って来れないのよ。」

一護は納得し「そういえば」と呟く。

「俺が勝手に居候中って事、あんたの母は知ってんのか?」

一護はそう聞くと、夏美はニコツと笑う。

「勿論よ。一護さんがこっちに来た日の夜、ママに許可を取っていたの。」

心配無用よ!」

ピースをする夏美。

一護はそっかと呟いた。

「母…か…」

一護は誰にも気付かれないようにぼそりと呟いた。

時計が午後6時を指した時、玄関から明るい声が聞こえた。

「ただいま!」

「お帰りなさい!ママ!」

夏美は元気良くリビングから飛び出す。

冬樹も姉の後をついていく。

「随分と明るくなったな。」

一護は隣に座っているケロロに声をかける。

ケロロはニコッと笑い、一護に言った。

「ママ殿は普段は忙しくてなかなか帰って来れないであります。こつやつて久々にママ殿と話すことが夏美殿と冬樹殿の楽しみであります。」

一護殿は、普段は母殿と話しているでありますか？」

「…え…？」

「だーから！一護殿は、普段は母殿と話すでありますか？」困惑する一護。

視線があちらこちらと向いている。

一護の様子が変わった事に気付くケロロ。

「俺は…」

その時、バンッ！と勢いよくリビングのドアが開いた。

「ただいま！ケロちゃん！！」

日向家の母…日向秋が手に白い箱を持って立っていた。

「ママ殿！お疲れであります…！」

ケロロも敬礼して言った。秋は、一護に視線を向けた。
一護は軽くお辞儀をした。「あら、君がイチゴ君？」

秋が笑って言った。

一護は秋の自分の名前のアクセントが違うことが気になったが、あえて口にはしなかった。

「…勝手にお世話になっております。…黒崎一護です。」

立ち上がり、苦手な敬語で話す一護。

「よろしくねイチゴ君。私は日向秋。」

そついつて手を差し出す秋。

一護もその手を握った。

(…あたたかい…)

9年も握らなかつた母の手。

それは、とても温かく、一護を安心させた。

握手を交わした後、秋が尋ねた。

「イチゴ君って…漢字でどう書くの?」

秋は『イチゴ』という名はあまりぱっとしないらしい。

「一等賞の『一』に、守護神の『護』で、『一護』。…細かく言えばアクセントは『い』。そうしなければ、果物に間違われますから…」

気難しそうに言った一護。

秋はニツコリ笑った。

「もう敬語なんて使わなくていいわ。

…敬語、苦手でしょう?」

図星の一護は「…はい…」と恥ずかしそうに言った。

そんな一護を秋はほほえましく思った。

「一護君は、何処から来たの?」

「えっと…」

その時、ケロロが遮る。

「一護殿！安心していいであります！」

ママ殿は信じてくれるし、秘密も守ってくれるであります！！」

一護はケロロの言葉で自分は異世界から来たことを秋に話す決心をしました。

～説明中～

「…そうだったのね…辛かったわね、一護君。」

「いえ…」

いきなり、秋が一護を抱きしめた。

秋より一護が大きい為、一護は若干屈んでいる。

「ああああ秋さん!？」

一護は顔を真っ赤にしてあわてふためく。

「好きなだけ、こっちに居ていいわよ。…今日から一護君も私たちの大切な家族よ!」

その言葉に驚く一護。

「…ああ…」

恥ずかしそうに一護は返事した。

しばらくして、秋は一護を解放すると、手に持っていた箱を開けた。中には、ケーキが人数分入っていた。

「お土産よ。好きなもの取ってね。…ほら、一護君も遠慮しないで!」

全員ケーキを取り終わると、一斉に食べるはじめた。

（…よかった…此処なら、安心して様子を見れる。）

一護はケーキを食べながらそう考えていた。

第11章 日向家の母（後書き）

こんなに遅かったのに、話しが短くてごめんなさい！

これからはちゃんと活動しますので、温かく見守っていてください。

第12章 登校 (前書き)

かなりの久々の更新です。

毎回遅くてすみません！

そして短いです。

それと、これからオリキャラが多数出てきます。

第12章 登校

今、一護が目指しているのは吉祥学園。

吉祥学園は、中高一貫校なのだ。

何故、一護が吉祥学園に向かっているのかは、数日前のある晩だった。

『一護くんは高校生？』

日向家の母、秋からの質問。一護は疑問に思いながらその質問に答える。

『高3っすけど...』

秋が手を揃えて笑顔になる。

『よし、一護くんは明日から高校に通いなさい!!--』

『はあああああっ!?!?』

…

「それにしても、吉祥学園って、でかいな。」

そんな出来事で校舎の前に立った時、余りのでかさに一護は溜息を
着いた。

一護が編入するクラスは、3-3。
担任は…

「…越智さんだ…」

一護が空座第一高等学校の一年生の時の担任に性格がそっくりだった。

それだけで一護はホッと安堵する。

「黒崎一護です…よろしくお願いします…」

性に会わない敬語で挨拶を交わした後、二人は教室へ向かった。

教室についた一護は担任：速水満美子に合図があったら入るように指示された為、廊下で立っていた。

中からは速水の声が聞こえる。

そんな事を考えていると、中から「はいつていいぞ〜」と指示があったため、教室のドアを開ける。

一護は、黒板の前まで歩くと、白いチョークを手に取り、名前を書く。

「黒崎一護だ…よろしく。」

一護は、軽く挨拶をした。

速水は、満足気に頷くと、席に座るように促した。

(…平和だ…)

普通の高校生活って、こんな感じなのか？)

只今、ホームルームが終わり一時限目の開始前の休み時間。一護は頬杖ついて外を眺めていた。

「…虚がないだけでこんなにも違うのか…」

ふと、脳裏に浮かんだクラスメート。

「あいつら、今は何をしてんのか…？」

そんなことを考えていると、一護の席の前に誰かが立った。
一護はその人を見る。

少し跳ねた、艶のある黒髪と黒い瞳。

「どうもはじめまして！！僕は荒木田嶺あらいだりやう！！
よろしく…！！」

一護はふと微笑むと、差し出された手をしっかりと握った。

こうして、一護の高校生活一日目が終わった。

第12章 登校（後書き）

はい、グダグダになりました（泣）
相変わらずのかな文章力の低さ。

誰か、私に文章力を分け与えてください…！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741v/>

死神とカエル

2011年11月5日23時06分発行